



都会に「森」があることに気付く人は少ない。けれど、都会にも間違いなく「森」は存在する。むしろ「森」というのは比喩であり、胡散臭い鬱蒼とした場所という意味だ。

私が「森」を発見したのは偶然だった。

下校時に駅前通りを歩いていた。すぐ前方に広澤カナメの背中がある。

最初は、ただ、見ているだけで幸せだった。胸の中が、甘酸っぱい何かでいっぱいだった。しかし、その甘酸っぱい何かは、決して決して原型のまま、大人しく乙女の胸に鎮座し続けることはないわけで、だんだんとはみ出して、漏れ出して、溢れ出してくる。日を追うごとに、想いが募るほどに、どんどん。

願わくば、その笑顔を私のためだけに向けてほしい。隣に並んで歩きたい。すごく親しげに会話をしてみたい。そして最後はひとつになり、そのまま化石と化し、継ぎ目さえ消え、もともと二人であったことすら分からなくなればいい。

そういった特権を、目下、当然のこととして享受しているのは私ではなく、カノジョである。そうなのだ。広澤カナメにはカノジョがいる。しかも極上の。最高級品質の。なんだかんだいいながら広澤カナメ十六歳、高級ブランドに他ならず、そのことを本人も自覚しているのか、いないのか、彼にふさわしい高嶺の花レベルのカノジョを、ちゃっかし、つかまえてる。まったく腹立たしいっただけ。そのまんまだ。これは方程式ほど揺るがし難き、当たり前の実態だ。

分かっている、私の視線は勝手に、もうほとんど条件反射的に広澤カナメを追う。授業中はおろか、こうして帰り道までも。

広澤カナメは神々しすぎて、まさにもう、カナメ様って感じである。彫刻刀で彫り込んだかのようにくっきりとした二重瞼の瞳、それはいつもどこかアンニュイな空気を彼の周辺にまき散らす。そしてカナメ様、芸能人ばりに表情が豊か。心の細かな襞の数だけ、きっと彼は表情を持っている。とりわけ素晴らしいのは笑顔。これがもう、ぬいぐるみのクマちゃんみたいに可愛くって、陽だまりみたいに優しいんだ。気がつくと、私は彼の表情を食い入るように観察したい気持ちと、あんまり見ちゃ怪しまれるから視線を外さなきゃババって、という理性の間でゆらめいて、結果、彼をチラ見する。本当は彼を標本箱にはり付けてじっくり隅から隅まで観察したいのだけれど。これは他人に言えない危ない願望だ。

唯一、背中だけはビクビクせずに、じっと凝視することができる。同時に、しかし、その背中を見つめていると、いたたまれないほど私の心は掻き乱され、動揺し、切なくなる。

如何せん、彼にはカノジョがいるのだ。私の片想いは、ただ無意味に誰にも知られず降り積もってゆく。その降り積もった浮かばれない破片、アスベストなみの威力でもって、私自身を痛めつけるからタチ悪い。真剣に息が苦しくなる。

広澤カナメの隣を歩いている、カノジョという肩書きを与えられた幸福な女、武田紗由。造物主の傑作品。おそらくは、私を創った造物主とカノジョを創った造物主は、同一じゃなく別々に存在する。十六年前、私を創った造物主とやらは、どちらかというとな器用だったのだ。

すらっとして、華奢で、色白で、聡明。この十六年間、汚い世の中から隔離され大切に育てられてきた温室の美しい花のような武田紗由。よほど彼女を創りたまいし神は手先が器用だったのだろう。なんか、見ているだけで、こんな女め、と、めちゃくちゃにしたいくなる。そう思っ

てしまう私は悪なのかもしれないけれど、ただそこに存在しているだけで、他人にそんな感情を抱かせる彼女こそ私にとってはこの上ない悪なわけで、やっぱり私は、根本的に武田紗由という存在を好きになれない。

紗由、楽しそうに笑いながら、隣を歩く広澤カナメを見上げる。見つめ合う二人。眩しい。太陽に当たったバンパイアさながら、私は貧血が起きたわけでもないのによろめきそうになる。積もる、降り積もる、アスベストが胸をチクチク破壊する。

私の強烈な視線を無意識に察知したらしい。紗由がふいにこっちを振り向いた。クラスメートの私が目に入るや否や、無邪気な紗由は、微笑んで手を振った。そう、彼女は、私の身のうちに巢食う猛烈なまでの嫉妬心など知る由もない。いっそう憎悪がたぎる。するとそこに自己嫌悪まで絡み合う。私は全く罪のない無邪気な武田紗由をただ逆恨みしてる性格の悪い女なんだ、と思いき知らされる。始末に負えない。けどとにかく、ぼうっとしてるわけにもいかないし、こっちもあわてて笑顔をつくり手を振りかえす。何にもないふうを装って、やっほお、あははは、とか言って。私は全く広澤カナメなんぞ眼中にないです、世界が違うのです、紗由さん、あなたを妬んだことなんて今だかつて一度たりともございませんのよ、はい、って顔して。人はこうやって、いつも沢山の演技でもって自分の薄汚さをカモフラージュして生きている、少なくとも私、中原葉瑠はそうしてやりすごしている。

広澤カナメも、紗由の隣で「おっす」と言って手をあげた。ことのついでみたいにアンニュイに。哀しい、遠い、切ない、感情が音もなく、空気中に吐露される。それは溜息となる。

その後、私は思わず寄り道をするフリをして、路地に逃げ込んだ。もうこれ以上、二人の後ろ姿を睨みながら駅まで歩き続けることに耐えられなかった。そんな敗北感丸出しの卑屈な図なんて、ごめんだもの。可哀想指数、これ以上、上昇したら致死量に至る。

哀れな私、ひとり路地に逃げ込んだわけだが……。

「森」を見つけたのはその路地でのことだ。

薬局と婦人服専門店に挟まれてその店は存在する。一見して何の店だか分からなかったし、営業しているのかどうかさえ微妙な気配。どことなく閉鎖的な雰囲気醸し出されている。店の壁はびっしりと蔦で覆われ、色あせた看板の文字には「ココラダ屋」と書かれてあった。

ココラダ屋……？ 妙な名前のその看板文字はレトロなデザインで、映画で観たような古き良き昭和の時代を彷彿とさせる。はたして「ココラダ屋」とは、なにを売っている店なのだろうか。正直、少しばかり好奇心をくすぐられはしたけれど、店内に足を踏み入れる気など全くもってなかった。私は基本、臆病な事なかれ主義者なんだ。

けれど、思いがけず開いてしまった。内側から突然、扉が。まるで、びっくり箱のような勢いと突飛さで。

しかもそこから顔を出したのは、小奇麗に化粧を施した四十歳がらみの、男、だった。ガタイが良い上に、うっすらとした青髭が目につくため、ひと目で男と分かる。ショートカットの髪は眩いほどの金色に染められ、ブルーのアイシャドウが鋭い眼光をいくらか曖昧にぼやけさせている。耳たぶに吊るされた鎖状のピアスは、男が身じろぎするとシャランシャランと繊細に揺れた。金糸の刺繍があしらわれた黒地のロングスカートが、下品な印象ではなく神秘的であるこ

とが救いだ。

怪しさ大爆発だったから、あわてて立ち去ろうとしたけれど、完全にチャンスを失った。男がにっこり笑って手招きをしたのだ。その瞬間、男のペースにすっかり飲み込まれて立ちすくんでしまったため、背を向けて駆け出すタイミングを無くしていた。私はいつも、タイミングとの折り合いがあまり良くない。

さらに男が憐み深そうに、微妙に顔をしかめたかと思うと、

「アンタ、サエナイわねえ」だなんて、いきなり言ってきたから、たまげた。

啞然と立ちすくむ私に、男はなおも続ける。

「でも、意中の男をモノにできないのは単にサエナイからじゃない。そうゆう役回りなんだと、アンタが自分で思っているからよ」

その助言は、ある種の救いなのか、ある種の挑発なのか、ある種の嫌味なのか、はたまた馬鹿にしているだけなのか、判断に困る。少なくとも、ほめ言葉ではないことは確かだったが、私の内情に関して何かしら把握しているらしいことに驚き、腹を立てる余裕というものがなかった。仮にそれを差し引いたとしたって、この男には不躰な発言さえ許させてしまう特別な何かがあった。怪しげな風体にもかかわらず、男とか女とかいう枠組みを超えた次元での包容力みたいな、他人の心をかっさらう圧倒的な何かがある。

「アタシの名前はミノル」と、その男はハスキーな声で名乗った。

店の中は古めかしいドラッグストアのように種々の薬箱が陳列されていたが、部屋の中央には白いベッドが置いてあり、その傍には手術器具とおぼしきものまで見受けられ、病院のようでもあった。その上こともあろうか、店の隅には占い師が実用かつインテリアとして活用するような水晶玉が、不気味な様子で鎮座ましましている。部屋全体をかたち作っている科学と非科学の異様なコントラストが、怪しさの度合い隕石大爆発級ときてるので、私は怖気づいた。

「なあに度胆ぬかれてんのよう」と、ミノルと名乗った男は呆れ声を出す。

「非合法でこんな店を開いてるとか思って軽蔑してるんでしょお」

「……え？ あ、いえ」

いいえ。もう全体的に立ち込めてるオーラにただただ圧倒されてるんです！ 私は瞳で訴えかける。声には出さずに。その心中を知ってか知らずか、ミノルさん、なぜか勝ち誇ったかのようにケラケラ笑った。

「ああら、アタシ、こう見えてもちゃんと国家試験を通過して、医師免許もってんのよ。見かけこうだから、最初だれも信用しないのよねえ」

その後は投げやりな所作でスチールの椅子に腰かけ、その向かいのもう一脚の椅子に座るよう、私を誘う。私は「いいです」と手を振りながらのけぞった。あなた、普通の医者じゃないですよ、いくら医師免許もってても！ と声を大にして抗議したかったけど、できなかった。まごついている私を見て、ミノルさんは自分で白状した。

「ま、もっともアタシって、医師会にも所属していない異端児だから、闇医者みたいなもんだけどねえ〜」と。

ああ、やっぱりそうなんだ。でも、すでに、職業が怪しいとか、もうそういうこと以前に、ミ

ノルさん、あまたいるそこらへんの人間とは一風違う（外見だけじゃなくて）ってことは、すでに明白だった。さっき私がこの路地へ逃げ込んできたとき、彼、ここの店の扉を開け、私が事情を話さなくても知っていたのだ。私の可哀想指数かなり高い情けない恋愛事情。そんなことを言い当てられた日にゃ、こっちとしてはとても尋常じゃいられない。洞察力とかの域を超えて、ひたすら不気味。

そのミノルさんの不可思議なチカラについても、彼の素性についても、あまりに曖昧模糊として、この後も結局それらは謎に包まれたままになる。

さておきだ。とにかくしかし驚いたことに、ミノルさんは惚れ薬を作れると言いだした。その報酬として、私の生身の左腕をミノルさんに差し出すのが条件だという。ミノルさんは医術と魔術を織り交ぜた独自の技術で、私に新しい義手を提供してくれるというのだった。

とても荒唐無稽な話に思えたけれど、ミノルさんは終始まじめだった。そもそもこの二人は頭がおかしいのかもしれない。百歩ゆずってミノルさんの話を真っ向から受け止めるにしたってだ、恋愛成就のためとはいえ、いくらなんでも左腕一本、捧げるっていうのは狂気の沙汰ともいうか、ちと早まりすぎて感がある。しかも聞くところによれば、その惚れ薬の効用はたった十日間だというから、胡散臭いだけではなくてお得感すら感じない。

私が黙っているのを、何か躊躇しているとでも思ったのか、ミノルさんは後押しするように言い募った。

「義手っていてもアタシの義手はとても精巧にできていて、神経回路レベルできちんと接続するのよ」

はあ…。無感動に頷く私にミノルさん、なおも義手のセールスポイントを語る。

「自在に動かせるし、本物とほとんど見分けがつかない。いいえ、むしろ、義手のほうがキメ細かな美しい肌を再現できるくらい」

そうしてさらには「論より証拠よね」とか言って、「ねえねえ、ちょっとこっち来てえ」と、奥に続く部屋から助手で雇っているらしい白衣の女性スタッフを呼び出した。

「このコの肉体は脳ミソ以外、すべてアタシが造ったパーツで組み合わされているのよ」

いきなりそう自慢げに言われて、私はすっかり当惑して女性スタッフの顔を眺めた。無表情だった彼女は、たまゆら笑みをうかべ、ミノルさんの台詞に頷く。その顔は最近のゲームやなんかにでてくるCGグラフィックのキャラクターみたいに綺麗だ。

「証明してみせましょう、センセイの技術がいかに高度なものか」女までもがそう言って、銀色のメスを私に握らせた。

「さあ、切って」

突然の申し出に私は狼狽える。この二人、やはり、そうとう重症なんだ。頭、おかしいんだ。もしくは、おかしいフリして人をからかっていると考えられる。それでサエない高校生、不必要にビビらせてなにが目的なんだろう。警察に通報したほうがいいのかもかもしれない。でもいずれにしたって、それはこの場所から無事に脱出してからのことだ。

「さあさあ、切りなさいってば」

私は首を小刻みに横に振り、血迷ったとしか思えない彼女の台詞を懸命に拒否した。

「やです、やです！」

「さっき聞いたでしょう。私の身体はすべてセンセイの造りあげた人工物だって。自由に動かすことはできるけれど、血液は流れていない。そのことを確認したらいいわ」

それはほとんど挑発に近かった。すっかり怯えて微動だにできなくなった私に、彼女は、ついには業を煮やし、渡したメスをまた私から取り上げる。

「やですうー！ ああやめてー！」

私がそう叫ぶのと同時、こともあろうか自分の手首に傷をつけた。

私、ウツと息をのんで傷口を凝視し、もう一度さらに驚いた。その傷口は、ゴム製品の切り口のようにパツカリと裂けてはいたものの、一滴も血が流れ出していないのだった。皮膚が精巧にできている分、その血液の流れない傷口が奇妙にグロテスクである。

よくできた義手だ。吐き気がしそうだ。

「どおするう？」

ミノルさんに答えを求められた。つまりそれは惚れ薬と引き換えに自分の生身の左腕をミノルさんに差し出し、こんなふうな精巧な義手を代わりに上げるかどうか、という答えなのだが、惚れ薬が本当に有効かどうかも分からないし、有効だったとしてもその効用が十日間しかもたないというのでは意味がない。そんなことを狼狽えた頭で吟味していたら、ミノルさんがまるで私の考えを覗き見したかのように言った。

「この際、他力本願な考えは捨てなさいよ。アンタは、十日間しか惚れ薬が効かないことを不服に思っているわね。でもその十日間の期間を利用して彼の心を本当の意味で掴むことは決して不可能じゃないはずよ。……さあ、どっちにすんの？」

再び詰め寄られて私は身を翻した。やっと本気で、思い切って、この場から逃げ去ることにした。

「考えてみます。で、また、改めてご連絡します…！」

もちろん、もう二度とこの店に来るつもりはなかった。私は店の扉をあわてふためいて開け、全速力で走り去った。

私は森を立ち去り、警察に通報することもせず普通の日常へと戻った。当然のことながらその普通の日常は、それほど魅力的ではない今までと変わり映えしない毎日だった。つまり私は、学校にいるあいだ広澤カナメを可能な限りチラ見し、カナメのカノジョを勝手に羨み落胆する、その連続、その繰り返し、パツとすることのない学生生活なのだった。しかしそれは絶望とかいう切羽詰まった重いものではない。むしろまい具合に定着し、日常化したカサブタみたいなどんよりとしたものだ。

絶望できるほどの希望なんてものが、そもそもはなっから存在しない。だって私は中原葉瑠なのだ。武田紗由ではない。だから、あんなふうに可愛く笑窪を出して微笑むなんて芸当できないわけで。要するに可愛げのない振る舞いしかできないわけで、広澤カナメの攻略法が、全然、まったく分からず……、というか、攻略するすべが私には皆無。

一方で、私の脳裏に焼きついて離れないのは「ココラダ屋」で起こったことだ。この目でしか

と見たあの精巧極まりないアンドロイドのような女。彼女の身体のパーツは脳以外すべてミノルさんが造り出した人工物だという。実際に、メスで傷つけても血液一滴流れない様子を自分で目の当たりにした。最初はそのシュールな映像が、逆にグロテスクな印象だったが、徐々に日が経つにつれて別の思いが心を占領した。血が一滴も流れないことが不自然なほど、あの精巧にできた美しい腕。白くて理想的な弾力とキメの細かさを有する肌は、直接触れたわけでもないのに理解できた。

生身の左腕を差し出すことにより与えられる義手が決して不格好な代物ではなく、むしろ本人のそれよりも美しいという事実。その事実が平凡な日常を面白くなくたゆたう私をちょっとずつ少しずつ誘惑し魅了しているのが自分でもわかる。例え彼らが詐欺師であったとしても、それはそれで良いような気がしてきた。だまされることよりも、本当に後悔するのは、なにも試さないことかもしれない。そして彼らが詐欺師でも精神異常者でもなかった場合、十日間、広澤カナメのカノジョとして過ごせば、本当に彼の心を射止めることが可能だろうか。仮に十日間の期日を与えられたら、私はその時間を最大限に生かすことができるのだろうか。人生を変えるチャンスかもしれない。それは珍しく私の中に湧き上がった前向きな挑戦心だった。

「森」を見つけてからちょうど二週間後、学校の帰り道、なんと私の足は再び「ココラダ屋」に向かっていた。

ミノルさんは、そうなることをあらかじめ知っていたかのようにであった。彼は私をその白いベッドに手招いた。

「さあ、こっちへ来て、さっそくオペに取り掛かりましょう」

承諾書にサインをし、オペは二時間ほどで無事に終わった。私の左腕は付け根の部分から義手になった。上腕から指先まで白く美しく華奢なその義手は本物以上の出来栄えだ。最初はこわばったような違和感があったけれど、しばらくするとスムーズに動かせるようになった。惚れ薬をゲットした上に、美容整形手術でも受けたような気分。十日後、再び広澤カナメの心が私から離れたら、今度は右腕をミノルさんに差し出そう、むしろそのほうが左右のバランスがとれていいかもしれない。店を後にするとき、そう思った。健闘を祈るわ、と手を振るミノルさんと目が合った。瞬間、彼の眼差しの奥で何かがチカッと光った。気持ちを見透かされた、そんな気がした。

左腕と交換に私がミノルさんから受け取った惚れ薬は、ごく小さな瓶の中に入った真っ赤な粉末だった。この粉末には私の左腕の血液がわずかに調合されているらしい。そうすることで、これは私専用の惚れ薬となる。翌日、その薬を鞆に忍ばせて登校した。

広澤カナメと紗由は中庭で二人きりで弁当を食べる。中庭には彼らのために存在しているかのような、おあつらえ向きのベンチがあった。そのそばには学生食堂があり、紙コップ式の自動販売機も置いてある。季節は秋口に入り、そろそろ温かいものが飲みたくなる頃だ。二人が弁当を食べ終わる頃合いを見計らって、私はあったかいココアが入った紙コップに惚れ薬を混入させ、ベンチに近寄った。

武田紗由に勝てるかもしれない。広澤カナメが手に入るかもしれない。

私は、すでに狂喜乱舞しようとする心を懸命に押しとどめた。

惚れ薬の効果は絶大だった。

もうその日のうちに変化がみられた。午後の授業なんて、チラチラと私が広澤カナメを盗み見ると、向こうもこっちを見ていて、何度も視線が絡まった。

下校時、校門付近で呼び止められた。

「ちょっと、中原、待って！」

きたきたきた...、と興奮しつつ、何？ としらじらしく尋ねれば、広澤カナメ、なんだかそわそわしながら、とりあえず駅まで一緒に歩こう、と言う。跳ねるな心臓、と叱ったけどムリ。駅まで他愛ない雑談をしながら歩いたものの、舞い上がりすぎて全く内容、憶えていない。

改札を通らず、私たちは喫茶店に入った。もちろん広澤カナメが誘ったのだ。なんだかしかつめらしい面持ちをして。

カナメはコーヒーを。私はアップルティーを頼んだ。カップを持つ手がプルプルする。緊張と期待で張り裂けそうにビビっていると、だしぬけに告白された。好きなんだ、すごく。

「.....え？ あの.....、えと.....」

「紗由と別れた」

「えっ？ あ...、そ、そう」

「泣かれたけど.....、もう全然、感情、ナイから。で、今、キレイさっぱりってわけさ」

バッチリだバッチリだバッチリだ。思わず歓喜した私ってドロドロだ。だけど実際、湧き上がってくるのは幸福感ばかりだった。私は左腕を犠牲にしてまで勝負に出たのだから。武田紗由が泣くくらいは、どうってことない。

「.....で、どお？ 俺じゃ、駄目ッスか？」

あまりのトントン拍子な展開に、あっけにとられて硬直してたら、カナメが真摯な眼差しでたみかけてきた。

その瞳に吸い込まれそうになりながら、私はやっとのことで声を出す。だ、だ、だ、駄目じゃないですぜんぜん駄目じゃないです。

おっしゃ、じゃ、中原葉瑠、おまえは俺のもの、他の奴、手出し無用。カナメはそう言って、アップルティー代をおごってくれた。携帯電話のメルアドも交換した。つまり私は彼女権を獲得した。十日間限定の。

休日の昼下がり、「やる」カナメの口から舐めかけのコーラ味の飴玉、ゴロリと私の口へ転がり込んでくる。生温かい、突然の、これはすでにもう、カナメの身体の一部のようなそんな飴玉。恋愛が成就したら人は単純に幸せになれる。バカみたいに簡単にバラ色の毎日が送れる。とろとろとゼリーのようにやわらかく十日間が過ぎ去ってゆく。浮かんでいて墮ちているみたいな感覚。

しかし哀しいかな、薬の効力が切れると、十日間積み重ねたはずのものさえも、どこへやら消

散霧消した。あまりにもあっけなくカナメが冷たくなった。

「マジ分かんねえ、自分でも。けど、気持ち誤魔化せない」とか言われた。お約束どおりの結果。そりゃあ、分かんないでしょう、カナメ様、あなたはただ薬に浮かされていただけなのですから。

でも私、手のひらにもうカナメの顔をすっぴり所有物みたいに包み込んだ時の感触、頬骨の感じとか、指の間くすぐる髪の毛の気配とか、憶えてしまってるし。それを今さら失えないし。カナメはもう私にとって麻薬だ。

「ごめん、俺、どうかしてたんだわ。ほんっと、ごめんな」

謝られた。けど、絶対、離さない。

私は「ココラダ屋」に駆け込んだ。今度は右腕をミノルさんに差し出し、その分の猶予を手に入れた。この度の十日間も、あまりにも素晴らしすぎた。

「俺、太ももに傷あんの。昔、犬に噛まれた」

新しい秘密を教わった。

見せて見せて、とねだって、そのささやかな傷痕を指でなぞるだけじゃまだ足りなくて、武田紗由の余韻を消すためにも、アイスクリームみたいに五十回ほど、丹念に舐める。あはは、やめろくすぐってえ葉瑠、おまえ犬？

そうだよ、私、犬だよ、カナメ様の。あははは、いい子だ。笑いながらカナメは私の髪をぐしゃぐしゃにする。どこにもいかない？ 当然。ずっと好き？ うん。顔いたくせに。

また十日間経過して、ふたを開いた結果、広澤カナメは、マジ分かんねえごめん、とほざいた。

私は左脚を差し出し、ほどなくして右脚も差し出し、順次その取り引きは続いた。そうして、あらゆる身体のパーツを次々とミノルさんに差し出した。クラスメートに「最近、葉瑠さあ、キレイになったね。恋愛のチカラってスゴイかも」と驚かれた。確かに美しく改造されてゆくことは嬉しい限りで、実際ミノルさんの造るパーツはどれも素晴らしい。しかし、確実に差し出すべき自分の生身のパーツが減っていくのは問題である。少なくともすべてが偽物になり変わるまでには、広澤カナメの心を掴まなければ、もう惚れ薬が得られなくなる。

サラ金に手を出して、どんどんハマっていくのって、ちょうどこんな感じなのだろうか。自分が止まらなくなっていることには気づいていた。でも、その止まらなくなっている自分をどうしようもできずにいた。ヤバイかも。心の片隅で時折、真剣に怖くなった。それでも私は取り引きを続行した。あげくの果ては、内臓の一つ一つまでも差し出し、そうこうしているうちに季節が一巡りした。

私は、脳ミソ以外すべて偽物になった。

もうどこを探してもミノルさんに差し出す生身のパーツが見つからない。

成すすべもなく私は「ココラダ屋」の前に立ちすくんだ。広澤カナメが、マジ分かんねえごめん、とほざいたら、いつもあわてて駆け込んだ店の扉の前。どこかに使い忘れの内臓がないか考えてみたがなさそうだ。心臓、肝臓、脾臓、胃、腎臓、卵巣、子宮、脊髄……。全部全部全部、もうない。

茫然として扉の前に佇んでいたら、扉が開き、中から人が出てきた。久しぶりに目を合わす。その人物は武田紗由だった。でも、すっかりくすんでいてどこか垢抜けない、以前とは別人みたいな武田紗由だった。彼女にとって、私は恋敵。てっきりすごい眼光で睨まれるかと思いきや、武田紗由は邪気なく微笑んで何も言わず去っていった。

開けはなされた扉から店内を見る。ミノルさんが丸い実験用のフラスコを片手に、助手の女と話をしていた。

「武田紗由、身体のパーツをすべて使って願望を叶えたのに、別の女に男をとられて、苦しすぎるからって言って、アタシの自慢の人工パーツみんな返品しにきたわ。まあもっともその条件として、恋心を頂いたけれど。金輪際、もうあの娘が恋をすることはない。だから人を想って切なくなることも泣くことも嫉妬に荒れ狂うこともない」

「ちょっと羨ましいような…。でも、やっぱり可哀想、ですね」

「恋心って、他の客に転売したらいい値段になるのよね。人が自分の身体を売ってまでも相思相愛を望むほどの大恋愛って、そうそうないから。そんなおっきな恋心の器を持っている人間、最近、減ってるから。地位も名誉もお金も手に入れた人間の多くが、大枚はたいて買ってくれる」

「苦しくても切なくても、恋心があるのは幸せですから」

「そお？ 片想いで浮かばれなくて何にも見返りなくても？ アンタも恋心さえ差し出したらすっかりラクになれるのよ。美しくなったはずなのにどうしてあの人は振り向かないのかしら、なんて悩むこともなくなる。何の役にも立たなかった人工パーツから解き放たれ、もとの肉体を取り返したらすべては白紙に戻り、傷は一瞬で癒えるのよ」

首を左右に振る美しい助手の女。

私は回れ右をして歩き出した。

ココラダ屋。ここは、ココロとカラダを差し出したり、授かったりする非合法の店。

この先、果たして切なさに耐えられるかどうか分からない。けれど、まだ手放したくなかった。広澤カナメを想う熱い胸の塊を、とどめておきたいと思った。すべて偽物で、すべて人工パーツで出来た私の身体。だけど、その奥にある、広澤カナメの陽だまりみたいな笑顔の記憶だけは紛れもない本物だった。